

趣味

井上 正敏さん (上島)

70歳。17歳から鳩の飼育を始める。鳩レース競技にのめり込み、獲得した賞状やトロフィーは数知れない。



レース鳩の魅力は？

人と同じで、顔つき、体つきが一羽ごとにまったく違う。レースは100kmの短距離から1100kmの長距離まであって、個体ごとに向き、不向きがあるんです。性格だって違う。温厚、神経質、意地悪……

普段いじめられているような気の弱い鳩が良い成績を残したりするんだから、面白い。

あとは、育て方の試行錯誤が結果に出てくること。勝つためには、勝負相手が寝ている間に努力することが大切だと考えています。真冬だろうが、朝の3時に起きて作業を

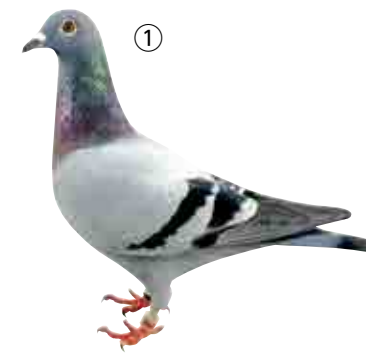
することもありますよ。やっぱり、勝ちたいんだよね。

趣味のキッカケは？

友だちが飼っていたのが始まり。高校生の時から52年間続いていきますね。賞状の数も、52年間一つの趣味を続けていることだけは、自慢できます。

競技人生のハイライトは？

神奈川県を含む4県のエリアで総合優勝した時かな。夢の中で、ある場所で願をかければ必ず優勝するってお告げがあったんですよ。そのとおりにしたら、優勝できた。夢に見るほどのめりこんでたっことですよ。上野の精養軒で表彰式があって、金屏風の前に立った時は本当に嬉しかったですね。



ベルギーまで鳩を買い付けに行ったことか、鳩レース界のスーパースター、ヤンセン・アーレンドクに会ったことも、思い出深いですね。バスケットで言えばマイケル・ジョーダンに会ったようなものですね。

人生で趣味を持つ意味とは？

私の場合、ある意味、人生を鳩に託したんです。他に自慢できることはないけどね。この世界にいるからこそ経験できたことがたくさんあります。普通だったら行けないような場所にも行ったし、競技を通じて日本全国に友だちができた。師と仰げるような人に会えたことも財産ですね。そう考えると、幸せなんじゃないかな。

これからの目標は？

春先に大病をして、少し視力に心配があるんです。以前どおりに鳩を育てることはできないですが、自分が経験して学んだこと、師匠から教わったことを、若い仲間伝えていければいいですね。

地域

遠藤 敦子さん (牛島)

67歳。開成町婦人会長。「瀬戸屋敷ひなまつり」を町の一大イベントまで成長させた立役者の一人。

婦人会に入ったキッカケは？

近所の方に誘われて、ですね。40代後半で入って、楽しんでるうちに、気がつけば会長になっていった感じです。地域に興味がない人が多くなっていると言われますが、自分の町を知って大切ですよ。

過去の活動のハイライトは？

ひなまつりが初めてNHKの番組で取り上げられた時のイベントという感じで、楽しかったですよ。組織としても勢いがあった、やること一つ一つに手応えがありましたね。



参加者を募って100mのロング手巻き寿司づくりに挑戦したのも思い出ですね。成功するか分らないんですから、ドキドキでした。でも、まずは運営する側が楽しまなきゃ。見事成功しましたよ。

地域活動の担い手がいないと言われますが…

地域活動への関わり方っていろいろあって良いと思うんです。それぞれ仕事や家庭があるんだから、地域との距離の取り方、どういう役割をどこまで担うか、違いを尊重することが必要じゃないでしょうか。そうしないと、お願いする側、お願いされる側、どちらも楽しくないですね。あと、何か役をあてられた

人に伝えたいのは、せっかくやるなら楽しんでほしいということ。役の特権で、とことん楽しめばいい。「つまらない」と思いながら義務を果たすのは、つらいだけだと思いますよ。

活動の原動力は？

結局は、人に楽しんでもらいたいですね。周りの人に喜んでもらえなければ、活動の意味はないと思います。あと、性格的に中途半端が嫌なんです。他人の評価は別にして、自分の中で100%じゃなきゃ嫌。頼まれごとがあっても、自分なりに勉強して、だんだん面白く感じてくるんですよ。だから、やらされてる感覚はないかな。

これからの目標は？

新型コロナウイルスのために活動が制限されて、久々にゆっくりできる時間をもらえました。これからの婦人会の活動をどうするかも考えています。まずは、目の前のことを楽しみながら、一つ一つ積み重ねていきたいですね。何ができるか、ウキウキしますよ。



① 瀬戸屋敷ひなまつりの「つるし雛」。インドネシアから注文が入ったことも。

② ひな人形づくりで培った技術を生かし、町の子どものために布マスクを作った。

① 総合優勝した鳩、J.D ブルーQueen号。ヒナの時から逸材だと分かったという。

② 鳩舎。ここまで大きなものは珍しい。レースでは、出発地点から鳩舎に帰ってくるまでの時間を競う。

